

---

---

## 第 70 回数理社会学会大会 (JAMS70) 萌芽的セッション 報告概要

日時：2021 年 3 月 8 日 (月) ～3 月 9 日 (火)

会場：オンライン (Zoom)

大会委員長：竹ノ下弘久 (慶應義塾大学)

---

---

### 萌芽的セッション (ポスター報告) I

3 月 8 日 (月) 13:15～14:35

#### 【会場 1・Zoom1】

#### 1 過去の奨学金が貸与か給付かは現状の格差にどう影響するのか？

百瀬由璃絵 (東京大学)

奨学金の返済が儘ならない者が増加し、奨学金を貸与から給付へ変更すべきという議論が出され、近年奨学金のあり方が問われている。日本において給付奨学金は多様にあるものの、実証研究は進んでいない。給付奨学金は、出身地域や学部学科の領域、海外留学生などで対象者が限定される。そのため給付に応募できず、貸与に頼らざるをえないことも考えられる。本研究では、過去の奨学金制度の違いによる現況に対する影響を検証する。

#### 2 質的方法の比較——先行研究議論の上書き——

中澤香世 (早稲田大学)

本報告は 3 本の査読論文の比較分析である。3 つの質的方法 (差異法、混合システム、歴史的比較分析) を論文に適用した結果、明らかになった点を整理する。いずれも先行研究議論を部分的に上書きする必要がでてきた。

#### 3 ゴフマンのスティグマ論のゲーム理論的定式化をめざして ——パッシング、カバリング、機転と相互行為秩序——

木村邦博 (東北大学)

スティグマ的特徴を持つ者と他者との相互行為をゲーム理論的に定式化することをめざす。相互行為秩序の維持という観点から見ると、見知らぬ他者にスティグマを隠すパッシングは不完備情報ゲームにおける戦略として位置づけられる。自分のアイデンティティを知っている他者に対してスティグマを隠すカバリングと、スティグマを笑い飛ばす機転とはともに、完備情報ゲームにおける戦略として位置づけられる。

#### 4 履歴書実験において人事を対象にする必要はあるのか

○五十嵐彰（立教大学）

麦山亮太（一橋大学）

外国人差別を検証するための履歴書実験の研究対象者は、主に人事とそれ以外に二分される。このうち特に人事を対象にした研究は珍重されるが、人事以外を対象にした研究は、人事を対象にした研究とどのように異なるのだろうか。検証結果から、人事でもそれ以外でも、履歴書のうち応募者を判断するための特徴は同一であった。人事の方がより特徴の効果が強かったが、それは人事かどうかというより、人事としての就業年数による違いと指摘できる。

#### 5 推論的ジレンマが生じ得る議題の集会的決定の精度を最適化する票の重み付け

関口卓也（理化学研究所）

推論的ジレンマを回避するための代表的手続きである「前提部に基づく手続き」と「結論部に基づく手続き」を適用するのに必要な投票結果がそれぞれ与えられた場合、能力の異なる各個人の投票結果にどのように重みづけをすることが結論部の真の状態を推定するうえで最適かを示す公式を導いた。これは、前提部の命題数が任意の場合に適用可能である。公式の特徴を、単一命題を扱う場合（コンドルセの陪審定理）と比較しながら議論する。

#### 6 フィールドワーク授業が地方定住に及ぼす影響

——授業履修者のパネル調査データによる検証——

○堀内史朗（阪南大学）

松坂暢浩（山形大学）

若年者の地方定住を促進するため、「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+事業）」が2020年3月まで進められていた。COC+事業の一環で行われた、その地域内でのフィールドワーク授業が、受講生の地方定住に結びついた可能性を、東北地方にある大学生に対するパネル調査データの分析によって検証した。分析の結果、フィールドワーク授業を受講した学生は、その地域へ定住する確率が高くなるだけでなく、当人の出身地、ないし東京以外の地方への定住率も高くなる傾向があることが分かった。

## 7 日本の twitter におけるイデオロギーによるメディアオーディエンスフラグメンテーション

○瀧川裕貴（東北大学）

永吉希久子（東京大学）

日本の SNS 上において、メディアに関するイデオロギー的な選択性が働き、オーディエンスフラグメンテーションが生じているかどうかについては論争がある。本研究では、政治的関心の高い twitter ユーザーが RT したツイートにおける url リンクを解析することで、イデオロギーによる選択性の有無を検討した。結果、一部の先行研究と異なり、日本においてもオーディエンスフラグメンテーションが発生している可能性が示唆された。

### 【会場 2・Zoom2】

#### 1 学校におけるいじめの実態——Web 調査をもとに——

眞田英毅（東北大学大学院）

これまでの学校におけるいじめに関する調査では、被害者に「いじめられたことはあるか」といった被害経験の有無をたずねているものが多く、いじめの詳細な内容がわからないといった問題点があった。また、加害者がいじめにおいてどのような行為をしているのか詳細に踏みこんだ研究はなかった。そこで本研究では、いじめ被害と加害の両方について、いじめの内容やその頻度、対象などについて Web 調査でたずね、どのような行為がいじめとみなされているのかや、いじめの加害被害経験割合などについて分析を行った。

#### 2 勤続に伴う労働時間の変化

田上皓大（慶應義塾大学大学院）

典型的な日本的人事管理モデルにおいては、年功賃金制度や遅い昇進と言われているように、長期雇用のもとで勤続とともに賃金や職務などの処遇が変化する。しかし、このような視点のもとで勤続に伴う労働時間の変化を検討した研究は多くない。本研究では、パネルデータを用いて、初職継続男性労働者の勤続に伴う労働時間の変化を分析する。

#### 3 女性の世代内移動——非正規雇用から正規雇用への移行について——

LEE HANSOL（京都大学文学研究科社会学専修）

グローバル化に伴う労働市場の不安定化により非正規雇用が世界中に広がっている。このような中で先行研究では、女性にとって非正規雇用になっていることが行き詰まりを意味するという主張が計量的に検証されてきた。本報告では先行研究をさらに深めるために二重労働市場理論と人的資本論に着眼し、女性の正規雇用への移行原因を構造的要因と個人的要因に分けた分析を行う。そのうえで、労働市場を中心とする女性のライフコース形成のメカニズムをイベントヒストリー分析を用い検討することを目標とする。

#### 4 クラウドソーシングを用いたデータ回収と回収したデータの質の検討

伊藤大将（東洋大学）

クラウドソーシングは、ウェブを通してクライアントが作業を依頼し、その作業をできる人が行う場のことである。近年、アンケートの回収も行われている。応募者は平日と休日にそれぞれ 500 件のデータを回収した。データの代表性に重きを置く社会学的な研究で、クラウドソーシングを通して回収したデータは使用可能なのかを、パスポートや運転免許証の所持率、外交に対する意識といった政府統計の結果と比較することで検討する。

#### 5 科学的な価値判断にかんする要件について

志田基与師（横浜国立大学）

科学と価値判断とは独立であるという Weber の主張は、科学に関するものであって、価値判断にかかわるものではない。科学が価値判断に汚染されていけないかどうかの問題はさておき、価値判断が（広義の）科学に抵触することは許されない。それは価値判断に関する論理形式の問題であり、客観的な議論が可能な性格を持っている。このことを実際の政治的主張（政策的価値判断）を事例として検証する。

#### 6 職業世襲と家族の親密度

三輪卓見（東京大学大学院総合文化研究科）

現職が父職と職種レベルで同一である状態を「職業世襲」と定義し、職業世襲が家族意識（家庭生活満足度・家族優先意識・家系継承意識）に影響を及ぼすのか、JGSS-2006 のデータを用いて分析した。その結果、i) 職業世襲一般の効果として家庭生活満足度を向上させること、ii) 層別化すると、若いコホートや女性などの職業世襲の割合が相対的に小さいグループにおいて、世襲の正の効果が生じることが見出された。

#### 7 社会学研究における二重過程理論のインパクトと役割の検討

——動機と正当化モデルとフレーム選択モデルを事例としたレビューを通して——

○尾藤央延（大阪大学人間科学研究科博士後期課程）

齋藤僚介（大阪大学人間科学研究科博士後期課程・日本学術振興会 [DC1]）

近年、文化や規範などマクロな現象を扱う社会学においても、二重過程理論は無視できない存在となっている。他分野での論争にみられるように、二重過程理論などの自然主義的知見の導入には危険も伴う一方、社会現象の説明をより豊かなで妥当なものにする可能性もある。本報告では、欧米圏でポピュラーとなりつつある Steve Vaisey の動機と正当化モデルと Hartmut Esser らのフレーム選択モデルおよびその応用研究を中心にレビューし、社会的メカニズムの解明を試みる社会学研究における、二重過程理論の役割や可能性、導入における問題点について検討する。

## 萌芽的セッション（ポスター報告）Ⅱ

3月9日（火）9:30～10:50

### 【会場1・Zoom1】

#### 1 親の教育アスピレーションが教育的成果に及ぼす影響

——Diagonal Reference Modelによる教育アスピレーション・教育期待・過剰アスピレーションの識別——

須永大智（大阪大学大学院）

本報告の目的は、親の教育アスピレーションと教育期待を区別し、なおかつ、過剰アスピレーションを考慮したうえで、親の教育アスピレーションと教育的成果との関連を検討することにある。親の教育アスピレーションが教育的成果に対して正の影響を及ぼすという主張に対して、先行研究から二つの問いを提起することができる。第一に、Kerckhoff (1976) 等が指摘する教育計画の解釈についての問い、第二に、過剰アスピレーションについての問いである。そこで本報告では、Diagonal Reference Model を用いて上記の問いに対処し、親の教育アスピレーションがもつ効果を再検証する。

#### 2 The relationship between sex composition of workplace and women's career trajectory in Japan

池田岳大（東京大学）

The aim of this study is to clarify the relationship between sex composition of workplace and women's career trajectory in Japan. In previous studies, two main theories have been suggested to explain this relationship: social categorization theory, and tokenism theory. Using original data from the women's life course survey in Japan, discrete-time event history analysis reveals that the gender composition has no effect on turnover rates among women. Thus, both theories are rejected in this study.

### 3 チスイコウモリの社会形成のシンプルモデル

○川村 松吉 (東北大学電気通信研究所)  
三上 大志 (東北大学電気通信研究所)  
加納 剛史 (東北大学電気通信研究所)  
石黒 章夫 (東北大学電気通信研究所)

チスイコウモリは、48~60時間エサが得られないと死んでしまうか弱いコウモリである。しかし、彼らは血縁に関係なく獲物にありつけなかった他個体に吐き戻した血を分け与え、その代わりに自分が困った時に助けてもらう関係を築くことで、ときに10年以上生き延びることができる。本研究では、三上らが取り組んだチスイコウモリの社会形成を再現するモデルを単純化して、社会性のエッセンスを比較的抽出しやすい形に再構築することで、高いしぶとさを持つ新たな工学システムの設計につなげたいと考えている。当日は、現在取り組んでいるモデルとそのシミュレーション結果を報告する。

### 4 項目スキームに対応したダミー・コーディングとマルチレベル分析

——平等化政策への支持態度に関する規定要因の分析を例に——

林拓也 (奈良女子大学人文科学系)

本報告では、調査で設定した項目群が複雑なスキームから構成されており、かつデータにおける当該項目群の値の変動が緩やかな次元を有している場合に、それらを従属変数とする要因分析を行うのに適した分析モデルを提案する。その要点は、項目が回答者個人にネストされたデータに組み直した上で、多変量マルチレベル回帰モデルを適用すること、そして項目カテゴリーをダミー変数に変換する際、項目スキームに対応したコントラストコーディングを施すことである。データとして、6項目からなる平等化政策への支持度と、それを規定する要因と想定される個人属性・意識変数を用い、政策全般への支持度に対する効果と、個別の政策（群）への相対的優先度に対する効果を弁別して析出する。

### 5 継続社会調査におけるあいまい・中間回答の増加について

前田忠彦 (統計数理研究所)

社会調査では、回答者が「わからない」意の回答をした場合にD.K.(Don't Know)が記録される他、項目の選択肢そのものに「いちがいにいえない」「どちらともいえない」などの、態度の曖昧さや中間的な回答が用意されることもある。こうした回答は、継続社会調査において増加傾向にあるようだが、そのような増加トレンドと、回答者属性による違いについて、統計数理研究所による「日本人の国民性調査」を題材として検討する。

## 6 芸術系学部出身者の社会経済的地位

○井上智晶（東京大学学際情報学府修士1年）

三輪哲（東京大学社会科学研究所）

芸術系大学，芸術系学部を卒業する学生たちは毎年一定数存在する一方で、卒業後どのようなキャリア，ライフコースを選択するのかは未だ不明な点が多い。そこで，本研究では芸術系大学，芸術系学部から労働市場へ移行する間にどのような特異性があるのかを検討するため，初職，現職の雇用形態と就業形態，現職の就業理由，収入などの変数に着目し，芸術系学部出身者の労働について他学部出身者と比較検討する。

## 7 ハビトゥスは測定可能か——嗜好品の嗜好と摂取の区別から——

橋爪裕人（公益財団法人たばこ総合研究センター）

社会調査において嗜好を測定する際に，しばしば実際の「行動」が測定されてきた。しかし，P.ブルデューも『ディスタンクシオン』において，ハビトゥスとプラティックを区別したように，嗜好と実際の行為は全く同じではない。本研究では，ウェブ調査のデータを用いて，嗜好品の「嗜好」と実際の「摂取」の関連や，それぞれとSESの関係性を比較することで，これまでの「行動」による測定を批判的に省みるとともに，ハビトゥス概念の測定について検討する。

### 【会場2・Zoom2】

#### 1 DK 選択肢は「隠れDK」を抑制するか

——個人情報に関する意識調査を例として——

山本耕平（国際経済労働研究所）

回答者が明確な態度を形成していないトピックに関する意識調査では、「わからない(DK)」という選択肢を設けるかどうかはしばしば問題になる。本研究では，個人情報の利用をテーマとしたウェブ調査のデータを用い，DK 選択傾向を考慮して中間回答傾向を予測するモデルを推定し，明確な態度を有さない回答者が，DK 選択肢があつたとしてもDKではなく中間的な選択肢を選んでいる可能性について検討した。結果はその可能性を示唆するものだった。

#### 2 社会ネットワークにおける多次元同類／異類結合の実態解明

鈴木伸生（岩手県立大学）

これまで，社会ネットワークの同類／異類結合については，多くの研究が存在するものの，多元的な同類／異類結合の実態を解明した研究は，ほとんどない。そこで，本研究では，社会ネットワークの諸特性を調査したデータの分析を通じて，社会ネットワークにおける多次元同類／異類結合の実態を解明することを目的とする。

### 3 学校信頼の規定要因に関する基礎的分析

#### ——「子どもの生活と学びに関する親子調査」から——

大崎裕子（東京大学）

本報告では、子どもの学校に対する保護者の信頼感の規定要因について検討する。近年、学習指導要領の改訂や入試改革など日本の教育制度が大きく変わるなか、学校はどのように保護者の信頼を得ているのだろうか。データには、小・中・高校生の子どもとその保護者を対象とした「子どもの生活と学びに関する親子調査」をもちい、学校の特性や家庭状況、子どものパフォーマンス、保護者の意識などが学校信頼に与える影響を検討する。

### 4 「多様な学習ニーズ」言説がもたらす大学進学への壁

#### ——「地域の高校」を捉える枠組みの導出——

田垣内義浩（東京大学大学院）

本報告では、地域の高校教育を一手に引き受ける「地域の高校」において重視される「多様な学習ニーズ」言説が、意図せざる結果として大学進学に対する障壁となりうることを検証する。独自調査を用いて、「多様な学習ニーズ」を重視する教育指導は、生徒が有する進路希望をそのまま尊重する傾向を有する反面、大学進学率の低さを維持・等閑視するネガティブな側面をもつことを示す。

### 5 痩身度と近代化・社会階層——日韓台中4カ国比較——

太郎丸博（京都大学）

社会階層と痩身度の関係が、国や出生コーホートによってどのように異なるのか検討した。日本、韓国、台湾、中国に関して分析した結果、男性では関連が見られず、若い女性に関しては学歴が高いほど痩せている傾向が見られたが、その詳細は国によって異なっていた。このような世代と国による違いは、近代化のスピードやタイミング、米国文化の影響力といった要因によるものと解釈できる。

### 6 高校生のジェンダー意識とその後の職業選択・職場選択

#### ——「高校生と母親調査」追跡調査を用いて——

高松里江（立命館大学総合心理学部）

本研究では、高校生の頃のジェンダー意識が、その後の職業選択・職場選択とどのように関連するかを検討する。「高校生と母親調査」では高校生を対象に2012年に質問紙調査を、2016年に追跡調査をおこなった。この調査では、スキルや働き方に対するジェンダー意識を尋ねている。これらの質問を用いて分析をおこなった結果、高校生の頃にもつジェンダー意識が、その後の自身の職業選択・職場選択につながることを示唆された。



## 7 マルチレベル SEM による映像品質評価への影響要因の検証

○塚常健太（東京都立大学）

新井田統（KDDI 総合研究所）

通信工学の分野ではサービス品質評価における MOS（Mean Opinion Score）など、社会科学の満足度などの意識項目と類似する指標が利用されている。この指標に多変量解析の手法を用いることで、新たな観点からの知見獲得が期待される。本研究では実験と質問紙調査を組み合わせ得たデータにマルチレベル SEM を適用し、実験条件と個人特性に由来する映像品質評価への影響要因を探る。

## 8 夫婦の職場環境と家事育児時間の関連——夫婦ペアデータを用いた検証——

田中茜（東京大学大学院）

本報告では、夫婦それぞれの職場環境が家庭内での家事・育児時間に対して及ぼす影響について検討を行う。夫婦ともに正社員で働いているカップルを対象を限定し、独自調査の夫婦ペアデータを用いて分析を行う。職場環境については育児休業制度や短時間勤務制度といった制度の効果に加え、そうした制度を利用しやすいか否かという制度の利用可能性についても検証する。